特集❶ 座談会

いま社会主義を考える

――ソ連・東欧の変貌をめぐって

ソ連・東欧社会の変貌は急速に進行しており、世界は新たな転換点を迎えている。この事態を受けて、『リベラル・アーツ』では、この方面の事情に詳しい先生方による座談会を企画した。座談会は本年の六月六日に行われた。以下はその記録である。

■出席者（順不同）
富森孜子（経済学部）
真瀬勝康（短大部）
徳永彰作（教養部）
工藤孝史（教養部）
堀川　哲（教養部・司会）

堀川　そろそろ時間ですので、ソビエト東欧問題についての座談会を始めたいと思います。今日は、フリーにしゃべっていただいて、日頃考えているところ、意見の交換をすればいいのではないかと思っております。ご承知のようにソビエトと東欧の最近の変化を、社会科学なり思想なりをやっている人間としてどのようにみていけばいいのか、社会主義そのもの自体がもはや救いようのない形で崩壊しているのか、それともこれは社会主義の再生とみていけるのかという根本的な問題もありますけれども、まず何が現在のソビエト東欧ないし中国を含めた社会主義の全世界的な動揺といいますか、一種の危機的な状況を生み出しているのかという事実認識の問題があります。日本の社会科学の場合は多かれ少なかれ、社会主義的理念というものが一つの大きなウェイトを占めていたと思うんですが、その社会主義の理念的なものと言いますか、社会主義の概念というものがもうこれ以降我々が考え思考していくうえで無意味なものとなってしまったのかというところまで含めて、これは基本的な問題ですから、現時点であまりクリアーな形では出せないと思いますけれども、印象論的なものも含めてやっていただければと考えています。

最初にソビエト東欧の変貌といいますか危機といいますか、それについてどういうふうに全体的にみていけばいいのかについて、徳永先生あたりから最初に出していただければと思います。

徳永　そうですね。ソ連のペレストロイカは今年で丁度五年目に入るわけですが、皆様ご存知の通り、昨年の中頃から今年にかけて、いわゆる「第二の二月革命」とか「再革命」と言われる程の激しい変革が、目をみはるば

偶像の崩壊
'90.1.14　ブラショフ（ルーマニア）にて（撮影：真瀬勝康）

かりの早さで進行しております。ペレストロイカは東ヨーロッパに飛火して、野火の如く広がりましたが、これを現象的に見てみますと、まずルーマニアでは、あたかも煮えたぎった圧力釜が爆発するような勢いで、改革というよりはむしろ革命ともいえる変革となりました。二五年間政権を握っていたチャウチェスク大統領は、昨年十一月の第十四回党大会で六選を果たした後の十二月二二日に政権を剝奪され、その四日後の二六日に秘密裁判により処刑されてしまいましたが、あまりにも急激な変化のために、十分な「受け皿」が準備されていなかった。イリエスクの救国戦線が急遽結成されて、暫定政権として後をつぎ、今年の五月二十日の総選挙でイリエスクが八五・一%の票をえて、大統領におさまったが、「受け皿」は、ボロボロになった旧共産党の焼き直しにすぎません。

「受け皿」の話がでたので、皿に譬えて他の諸国をサーヴェイしてみますと、ソ連では、あまりにも長期間使用した共産党の「受け皿」は腐敗し老化して使用に耐えなくなったために、新たに大統領という「受け皿」を作ってそれにゴルバチョフが乗り移ったという図式ですね。ポーランドの連帯は発足後十年の年月をかけて「受け皿」を強化してきましたが、最近は農民連帯の動きで皿も割れてしまい、更にワレサの中央同盟とマゾビェッキー首相の市民委員会とのひび割れが目立ってきております。ハンガリーは民主フォーラムが一応の政権をとりましたが、自由民主同盟、元共産党改名の社会党、小地主党、市民フォーラム、キリスト教民主連合、共産党、緑の党など、小さな「受け皿」が沢山犇めきあっている感じです。最もすっきりした形をとっているのは、西独という大きな「受け皿」に乗り移った東独でしょう。ユーゴスラビアは、民族の異なる各共和国にそれぞれ幾つかの「受け皿」ができて、それが勝手に廻り始めぶつかり合っています。そしてその皿をよく見ると、様々な穴があいていて、これは皿ではなくてむしろ笊。「受け笊」から水は漏れるは、穴をふさぐやら、水をかけ合うやらで大騒ぎしています。

このようにかつての一国社会主義、ブレジニェフ・ドクトリンの一枚岩はバラバラに崩れて、ソ連・東欧各国、各民族が独自にかつ多様に動き出しております。いろいろとお話を伺いながらその動きのベースやそれぞれの背景を探ってみたいところです。

堀川　東欧、ソ連の場合、民主化と普通言われていますけれども、よくわからないのは民主化というのは何であるかということで、これは以前中国人留学生といろいろ話をしたときのことですが、中国でも学生は民主化というふうに言ってますけれども、民主化というのは例えば経済システム全体を資本主義的なものにしていくということなのか、それとも単なる議会制民主主義システムのことを言っているのか、ということを聞いたら、民主化自体の内容というのは中国の場合ですとほとんどなくて、ただ単に今いろんな不満がある、それに対してレジスタンスが起こっているということで、将来の青写真についてははっきりしないというところがあるんですが、ソビエト特に東欧なんかについても現在進んでいる事態、特に改革派と呼ばれているグループが目指している方向性というのはこれはどうなんでしょうかね。経済システム全体を西欧的な資本主義的なシステムに全面的に変換するんだという意識で進んでいるのかどうか。それとも単なる修正でいいと考えているのか、あるいは政治的な問題で議会制民主主義といいますか、そういう政治的な民主主義を実現するんだというふうに考えているのか、あるいはそれらすべてを含んでいるのかどうかわかりませんけれども、特に経済の立て直しといいますか再建の方向について、なんらかのビジョン的なものと言いますか方向性、プログラム的なものですね、目指す方向というのをどういうふうに彼らが考えているのかちょっとわからないんですけれども、富森先生いかがですか。

富森　そうですね、今民主化という話が出ま

したけれど、それを論ずるに当たって十二月にクライマックスにいたる去年の夏から冬にかけての一連の動きをとらえる場合、まず戦後史全体の中に位置づける視点が重要ですね。ヤルタ体制といわれてきたものが何であったのか、今回の動きがその終焉といわれる所以ですね。更に八〇年代にはいってのソ連、東欧の諸変化、とりわけ八〇年のポーランドでの連帯の結成、八五年のゴルバチョフの登場、この二つが昨年末の東欧における雪崩的現象に与えたインパクトです。それらの延長線上に昨年の動きをみると、そのきっかけとなったのはやはりポーランドですね。一九八八年の秋に円卓会議の提案は出ていましたが、実際に円卓会議が開催され始めたのは一九八九年の四月で、それに引続いて選挙があり、連帯主導のマゾビェッキ政権が誕生したわけです。しかし、これも先の八〇年の連帯登場があってのことで、以上のようなプロセスとして今回の東欧の動きはみなければならないと思います。

更に、経済の民主化というか、経済ペレストロイカについてみると、この点ではハンガリーの改革が先んじている。もちろん違う側面もありますが、ソ連東欧の最近の経済改革の全体の構想としてはハンガリーのそれを後追いしている感じがします。ソ連東欧における経済改革の第一波といわれる一九六五年前後の改革の時から、ハンガリーの経済改革は、ソ連、その他の東欧諸国（ユーゴスラビアを除く）とは少し違っていました。特にそれは誘導市場モデルといわれ、今ソ連東欧諸国で出てきている市場メカニズム導入のモデルになっている部分が多いと考えられます。その限りでは、経済改革に関しては、変化の基点は、一九六五年頃に戻る必要があると思います。しかし結局ハンガリーの改革も、七〇年代の世界経済の変化の中で後退を余儀なくされ、成功したとはいい難いわけですから、何故うまくいかなかったのかというあたりも問題になると思います。

堀川　ハンガリーモデル自体も最初はうまくいっているというはなしを聞いたことがあるんですが、八〇年代にはいってハンガリー経済自体もうまくいかなくなってきたわけですか。

富森　そうですね、それを考える場合、ハンガリーモデルそのものが問題なのか、それとも七〇年代の世界経済全体の動き、とりわけ石油ショックに象徴された変化の影響によるのか、考える必要があると思います。日本経済は非常によい時期に高度成長し、沢山の金を借りたけど簡単に返すことが出来た。しかし東欧諸国は金を借りて一生懸命やったけど、七〇年代にそれを返す時期に世界経済がああいう状況になってしまったという時期的な問題もあるとは思います。しかし、当時としては先端をいったハンガリーモデルも結局のところ、政治改革の進展がないまま、十分機能せず後退を余儀なくされたと思われます。政治改革がおこなわれなければ、経済改革もうまくいかないというのが、今度の動きの中ではっきりした点で、この両者は車の両輪であるわけです。

堀川　その政治改革と言われる場合は、一党独裁制的なシステムを崩していかない限り経済もうまく動かないということですか。集権的な官僚制がある限りだめだということですか。

富森　それははっきりしていますね。一党独裁のデメリットはいろいろありますが、こと経済に関していえば、集権的経済管理体制を可能にし、ひいては強固な官僚制をつくりあげてしまったといえるでしょう。

徳永　一つの国の近代化のプロセスには独裁志向もかなり強くみられますが、次の段階でこれを排除することも近代化のプロセスです。一党独裁排除としてのゴルバチョフの政治改革が現在先行していますが、この改革の内容が経済改革のプロセスに作用するということになるわけですね。経済改革がおくれをとっているということです。

堀川　その点では例えば、日本の工業化のプロセスはデモクラティックなやり方じゃない

ですね。天皇制的な権力があって、政治的には非デモクラティックな形で工業化路線をやるわけですけれども、それはそれなりにうまくいくわけです。つまり経済を成長させていくんです。独裁制的な政治システムの下でもうまくいく場合がケースとしてはある。ソビエトなり東欧において今の時期になって非民主主義的な政治体制が経済成長のネックになってきたというのはどういうことでしょうか。

つまり一般的なねらいとして政治が民主化されない限り経済成長ができないとはなかなか言えないわけです。例えばファシスト的なやり方でも経済は成長する場合がある。だけどソビエト東欧の場合を見ますと、政治体制そのものが風通しがよくないということだから、経済成長にとってもネックになって、政治体制そのものを変えないかぎりどうにもならないというふうに最近言われてますけれども、この時期に言われ出したというのはどういう要因が作用しているんでしょう。

真瀬　僕はそのへんは独裁と経済発展というふうに言えば僕は時差があると思うんですよね。例えばスターリンの三〇年代の第一次五ヵ年計画等で、結局ロシアは工業国になったわけですね。大変な軍事大国になったし、それから東ヨーロッパはあまねく後進国だといっていいと思うんですね。もちろん一部チェコとかありますけれども、伝統的に東ヨーロッパと西ヨーロッパの比較の問題だと思うんだけれども、ドイツ、フランス、イギリスと比べたらはっきりいって、三流の資本主義だったわけですよね。ユーゴだとかルーマニアに至っては典型的な農業国だった。それから東ヨーロッパに限らずアジアの社会主義国であるとかあるいはキューバであるとか、そういうところを見ますと圧倒的に後進社会だったわけですよ。それがまがりなりにも国民が学校に行けるようになったり、医療が無料になるというような、きわめて独裁的なやりかたで経済成長をやっていった。これはあると思う。それ以降ですね、うまくいかなくなったのは。とりわけ石油危機の対応をめぐっていうことをきかなくなってしまったという形になった。一般に独裁体制が経済発展にうまくいかなかった、貢献しなかったということじゃなくて、彼等は成功する段階では相当集権的な、あるいは極めて強権的なやり方で経済建設を進めたわけだけれど、その結果東ヨーロッパは全体的に中身はずいぶんおそまつだけれども一応工業国にはなっている。

富森　その通りだと思います。ですから集権的管理が必要な時期というのはあると思います。日本だって戦後復興の時期など、そういう形での国家の役割は大きかったわけです。ただ集権的管理体制はやはり経済がテイクオフするまでの時期に有効であって、そのあと有効かどうかというのは疑問だろうと思うのです。量から質への転換という意味で内延的な発展の時期になってきますと、集権的経済管理体制のもつデメリットがはっきりしてくるわけです。

真瀬　今から五年前くらいにユーゴスラビアに留学したんですけれども、その時も今もずっと経済危機が続いているんですが、六〇年代、七〇年代前半に、かなり意欲的な経済建設をやってたんですよね。そのため外債を返せなくなってしまったということなんですけれども、ユーゴの場合、第一次石油危機の前後に、ものすごい勢いで経済成長している。それでユーゴの当局者は一人あたりGNPで西ドイツに、十年後に追いつくであろうという形でバリバリ借りまくってたわけですよね。それが破綻した。七〇年代の成長政策と、それから環境が変わったわけですね二回の石油ショックで、その対応はやはりかなり分析しないと答が出てこないんじゃないかなと思います。

徳永　そうですね。今言われたようにオイル・ショックが一つの転機になっていますね。日本の場合は、その頃私は商社にいましたので、身にしみて覚えているのですが、日本の企業は目の色をかえて、組織・人事の見直し、省エネ、経費削減と新技術の導入をはかるなどして、第一次、第二次オイル・ショックを

乗り切ろうと努力をしたわけです。

堀川　第一次オイル・ショックは一九七三年でしたか。

徳永　そうです。そして第二次は一九七八年でしたが、このような試練をうけて、日本の企業はご承知のように、その後の世界的規模の競争に十分張り合える体力をつけましたね。もっとも落伍者も随分でましたが。一方、社会主義諸国の方は、当時私はユーゴスラビアとソ連にいたのですが、あたかも石油危機を資本主義体制の内部矛盾の現れとみて、何ら対応策もこうじないまま、対岸の火事を見物するような気分で漫然と手を拱いていました。後になって、当時の経済指導者はそのことで批判されもしましたが、過去を反省の糧として取り組むのは結構なことですが、自国経済の低迷を、オイル・ショックを見過ごしたことや他の外的要因に求めるのは感心しない。むしろ、急速に変貌しつつある資本主義体制やその動向を旧態依然とした固定観念で見続け、自らの体制の自己矛盾にすら気付くのが遅かった社会主義諸国のショックは大きかったにちがいありません。その点でユーゴスラビアは、いま真瀬先生の話にもでましたが、結果の良し悪しは別として、かなりエラスチックな動きを示しました。

ユーゴスラビアは第二次大戦後、他の東欧諸国と横並びで、当時のソ連型コマンド・エコノミーを導入しましたが、導入後五年にしてこれを取り止めて、労働者による自主管理制度に転換しました。いわば、はやばやとユーゴスラビアなりのペレストロイカを行ったわけですね。終戦後の三年間はかなりの経済成長率を示しましたが、四年目から落ち込み始めた。民族間対立の激しいところに中央指令型計画経済を持ち込むことは難しい。更にスターリンとチトーとの対立も激化したため、何の未練もなく旧体制と訣別できたわけです。上からの指令で抑えつけられていた労働者も諸手をあげてこの改革に賛同し、その後暫くはある程度の生産成果もあがりましたが、一九六五年の市場経済の導入以降は自主管理制度固有の矛盾も表面化し、昨年末にいたる四〇年間並々ならぬ努力を重ね、右に左に揺れ動き試行錯誤を続けてはいるが、いまだに経済の低迷状態から抜け出るにいたっておりません。

昨年一箇年間のインフレ率は、なんと二五〇〇％即ち二五倍にものぼり、現地通貨のディナールの交換レートも一年間で二四七四％落ち込みました。毎日物価が上昇するので、人々は金が手に入ると直ちに物に換えるか、飲み食いに使ってしまう。街中のマーケット、レストラン、飲み屋がかなり活況を呈しているのは、市民の購買力が高いのではなく、異常なハイパー・インフレによるものなのです。一昨年であれば立派な食事ができた五〇〇〇ディナールを使い忘れて、今年になって日本にやってきたユーゴスラビア人に見せたところ、今これではアイスクリーム半分も買えはしないと笑われました。

財政赤字、インフレ、為替レートの低下を暫くの間無策に放置していたユーゴスラビア政府も、実はその間色々と準備を重ねてきたのですが、昨年の暮れになって、相当ドラスチックな経済改革を断行しました。即ち、給与は昨年一二月のレベルで凍結し、一万分の一のデノミを行ない、為替レートは、七新ディナールを一ドイツ・マルクに固定し、これをともかく六ヵ月間は実施するとの意気込みでした。その結果として、年間二五〇〇％にも昇ったインフレ率は、本年二月は八・四％、三月二・六％と沈静化し、四月には〇・二％、五月一％の物価の下落をみました。二二〇億ドルにも上った累積債務は一六六億ドルに減少し、零に近かった外貨準備高は五月末には一〇〇億ドルを越えるにいたった。まさに今までのユーゴスラビアからは到底想像しえない驚くべき成果といわざるをえません。この為に政府は、今までの垂れ流しの財政赤字を切り詰め、通貨発行を極度に抑えています。従って、昨今は企業の倒産が多発し、失業者も増加していますが、これは今まで自主管理のなかで甘やかされてきたユーゴスラビア企

業が世界市場のなかで競争力あるものに脱皮する生みの苦しみであるとしている。長々と喋りましたが、ユーゴスラビアがこのような思い切った政策を何時まで続けられるかは予想しえませんが、かつての社会主義国のなかにも、企業の自主化、独立化、経営強化のために敢えてかかる改革を断行している国もあるということを紹介致したかったわけです。

真瀬　今度のデノミは第一次世界大戦後のドイツのレンテンマルク（一兆マルクを一新マルクにデノミ）の発行に似ていると思うんですね。ユーゴの友人が言うには、政府は二割から三割の物価上昇を目指している。我々はそんなのはちっとも信じてない。社会主義計画経済はいつもプラン倒れだ。まあ二〇〇％ぐらいのインフレでおさまったら成功だろうと言っていた。それでも去年は二六〇〇％だったからずいぶん落ち着いた、ハイパーインフレーションは落ち着きつつあるということなんです。

　それで僕は話が前後してしまうんですけれども、民主化か民主主義かというところから話していきたいと思うんです。僕は今のソ連・東欧の変革にさいして社会主義体制の民主化なる言葉はこの間のソ連、東欧における人民大衆というか下からの運動から見ると極めて体制的な言葉であると思う。あれは単なる体制の手直しである。十二月二六日にチャウシェスクが処刑されたというニュースを衛星放送でみて、一月三日にルーマニアに行きました。ブカレストの革命集会で市民たちがルーマニア革命の目ざすものが民主化か民主主義かということについて熱心に討論しているんですね。特にルーマニアなんかを中心にして見ると、イエリネスクらに指導される救国協議会の連中が言ってることは体制の民主化、チャウシェスクの軌道修正という形だと思うんですね。僕は多くの民衆というのはそうではなくて民主主義、デモクラシーを目ざしている。この民衆の目指しているデモクラシーというのは何かというと資本主義以外に有り得ない。

　完全に体制の逆行で、これは新しい問題だと思うんですね。社会主義が資本主義に引っ繰り返る。しかも多くの民衆はそれを望んでいる。これは単に経済政策の失敗とかではなくて、もっと世界史的な体制・思想にかかわる問題だと思うんです。

富森　孜子氏

　それでもう一度、経済政策の問題に戻すと僕は四〇年代、五〇年代のソ連東欧だとか、全世界で社会主義運動を、あるいは戦後の東ヨーロッパの人民民主主義革命だとかいろいろ勉強したわけだけれども僕はだまされたんじゃないかと思う。今いろいろなニュースやドキュメンタリーなんかみてみると、宣伝映画なんですけれどみんな大衆はそれを信じて、新しい革命政権のもとで社会主義建設しようという民衆のいきごみがあったと思うんですよ。だけどそれをことごとくソ連と東欧の指導部が裏切っていった。こういう歴史があるから社会主義国の民衆は体制を全く信じていないですね。

　そこらへんで徳永先生が日本のオイルショックの対応と、例えばユーゴに見られる対応をみて全然ちゃらんぽらんだと言ったのは、一応政策的には改革を試みるのですけれども、その積年の嘘と偽りを本当に清算しないから新しい経済政策をうちだしても、国民に全く相手にされない。いくら絵空事を言ったって現実に階級社会でしょう。官僚ばかりうまいことやって一般民衆は関係ない。要するにまさに特権階級支配の社会である。そういうのが積み重なってきてるからいくら旗を振ってもうまく体制が廻らないんじゃないですか。

徳永　ですから、市場メカニズムを導入して

も、それが社会に根をはり成長するのが大変なんですね。指令型計画経済を排除したからといって、市場メカニズムが自動的に機能しだすわけではないし、一党制や党の指導性を排除したからといって、複数政党制がすぐさま出現するわけでもない。殊にソ連で大統領制を導入し、憲法を改正して「人間的で民主的な社会主義」を期待しても、おいそれとは現れてくれない。先程、話題に出ましたが、民主化のプロセスのなかでも、革命後七十数年もの間、現体制にドップリ漬かっていたソ連、そしてそれ以前でも、民主化、市民運動などに緑の薄かったソ連に比べ、東独、ハンガリー、ポーランドの動きは、ここに至ってかなり様相が異なってきているわけです。私も長年社会主義圏の企業と付き合ってきましたが、これらの国は、少なくともソ連よりは「企業とは如何なるものか」を知っている。ソ連にいて気になるのは、まだまだ一般大衆が育ってきていないということです。農奴制の安息、ソ連社会主義体制の安息が、伝統のなかで未だに息づいている。ペレストロイカとグラースノスチのおかげで、喋る声は大きくなったが、ペレストロイカで騒いでいるのは、ジャーナリスト、学者、文化人、一部の政治家・経済人などのインテリが主体で、事態の流れを把握しきれない党・政府の上層部や事態を冷やかに眺めている労働者・農民の動きが問題です。

企業の対応を見てみても、一時は自主独立制、自己資金調達制を取り入れて国家の傘から離れる方向にあった企業も、結局、市場経済の確立していない現状では生産に必要な原料の入手すら思うようにはゆかない。先日訪問したモスクワ近郊の繊維工場も、繊維原料の確保に多くの人々がウォッカーをお土産に走り廻っていたが、生産能力の四〇％程度の原料しか調達できず、万策尽きた企業長が、何やかんやと実体のともなわない行政指導に振り回されて、結局は従来の国家発注に戻らざるをえないと嘆いていたところにペレストロイカの難しさの一端を見たような気がしました。

労働者の対応をみても、今までの計画指令に慣らされてきた労働者が、突如として自らを活性化し、企業の生産技術やプロセスを見直して企業収益の向上に寄与するなどというわけにはゆかない。あるスーパーマーケットで、売上競争をブリガーダというグループに分けて実施したところ、従業員はサボタージュと無断欠勤で対応したという。ペレストロイカも労働者・農民の「やる気」を如何に引き出すかが決め手となりましょう。これは大変なことです。

富森　先程から民主主義、民主化という話が出ていますが、民主化イコール資本主義化ではないということ。すなわち民主主義という概念は、資本主義とか社会主義とかいう概念とは、全く次元の違う問題であるということです。資本主義が必ずしも民主主義的であるとは思いません。社会主義にも民主主義は必要だし、資本主義にも民主主義は必要です。当り前のことなのですが、改めて言っておく必要がある点です。

ところで、今徳永先生がいわれたことで私も同感の部分があるのでつけ加えさせていただきたい。それに先だって最近の私の経験についてお話しておく必要があると思います。私はたまたま、去年の夏ソ連邦に一ヶ月足らず、この三月にはポーランドに一ヶ月足らず滞在する機会がありました。ソ連邦では経済学者の視察団に加わり、十都市をまわり、工場、コルホーズなどの見学、学者・エコノミストとの懇談など、またポーランドではワルシャワを中心として、工場、協同組合、区役所などへ「全員面接調査」という方法で、労働調査にはいりました。滞在目的が違いますので、経験も異なり一概にはいえませんが、この両国は大分違うという印象をうけました。私たちは今まで、ソ連・東欧を一括してみる傾向がなかったとはいえない。ソ連邦、東欧八ヶ国、それぞれ民族的にも文化的にも宗教的にも様々な違いをもった人々が住んでいるのだということをまず認識しなければならな

いということです。例えばコミュニケーションセンスといいますか、人間関係でこの両国の違いを感じました。それぞれの背後にある文化の違いといいますか、はたまた議会制民主主義をどれだけ経験しているかなどいろいろな問題があると思いますが、とにかく違うんだという印象です。

たとえば、われわれは、社会主義というと飛行機や汽車など遅れたりするのは当たり前だとだいたい考えていると思うのです。たしかにソ連邦ではその通りでした。しかしポーランドでは定刻にきちんと出るのです。その点に関し、私どもはポーランド人に質問してみたのです。そうしたら、「きちんと出るのは当たり前だ」と怒られたんです。「われわれは定刻に出なかったら文句をいう」といわれまして、ハッとしたんです。このようなコミュニケーションセンスがあるとか、パンクチャルであるとかいうことは、これから市場原理を導入していく場合の受け皿という点で、違いとなって出てくるのではないでしょうか。

衛生の問題などでも大分違います。トイレなどみますと、確かにトイレの器具の質はどちらも悪く、使用していてこわれることもよくありました。しかしポーランドではきれいに掃除がしてあったけれども、ソ連邦はそうじゃない。どこへ行ってもトイレが汚い。これはどうしてなのかよくわからないんですが、公衆道徳といいますか、近代社会の最低のものがととのっていない感じです。

ここで、徳永先生のいわれた、ブリガーダシステムについてのポーランドでの経験をのべたいとおもいます。ワルシャワの計測器製造工場で、徹底したブリガーダシステムを導入していました。

堀川　ブリガーダ？

富森　ブリガーダというのは、語源からいえば作業班という意味ですがチームを組んで、チーム毎に作業をするやり方です。確かにこのブリガーダシステムは、スターリン時代の第一次、第二次五ヶ年計画期に広範におこなわれたやり方です。私どもも、それが参考になっていないかと、その責任者に質問したのですが、明確には答えてもらえませんでした。このシステムの理論的ブレーンである学者は、アメリカ、スウェーデン、更にトヨタの「カンバンシステム」も参考にしながら、ポーランドの実情にあったものを考え出したといっていました。そのやり方が、この工場の場合徹底していまして、仕入れから販売まで、すべてにブリガーダが権限と責任をもっている。沢山、質のよい製品を作れば、ブリガーダの利潤が多くなりブリガーダ構成員の賃金もそれに応じてあがるというシステムです。これでは社長なんていらないじゃないかという話まで出ました。このシステムを導入して二年間で労働生産性が非常に上がったと喜んでいました。日本と較べて格段に個人主義が強いポーランドでこのシステムが成功するかまだ疑問が残るところですが、むしろこういうシステムはポーランドよりソ連邦なんかの方がうまくゆくのではないかという感じがちょっとしたんですけど。最近中欧という地理的概念が再びいわれ始めていますが、この中欧に位置する、チェコとスロヴァキア、ポーランド、ハンガリーは他の東欧諸国と比較すると相当西欧的ですからね。

真瀬　僕は先程の汽車の話を大変興味深く拝聴したんですけれども、例えば汽車が非常に定刻通りに走るという意味では、西ドイツがその典型だった。しかし、今や西ドイツの賃金支払いがよくないんですね、よくストライキがあって私のベルリンにいる友人なんかは、このごろ西ドイツの汽車はよく遅れるということからすると、めずらしいお話ですね。

富森　ソ連は遅れ、ポーランドは定刻通りです。

真瀬　戦後のチェコ革命では、社会党と共産党でかなり多くの人が今までの体制はまずいということで、かなり頑張って新しい政権を作ったと思うんです。革命で成立した政権がずっとやってきたわけですけれどそれがうまくいかない。僕は思い出すんですけれど、象

徴的なのはチェコのハベル新大統領が年頭の挨拶で〝嘘はつかない〟と国民に演説した。あれだと思うんですよね。社会主義建設のある時期から相当言っていることとやっていることがまったく違う。そういう中で人間が非常にスポイルされてくる。そのことがすごく大きいんじゃないかな。僕は社会主義国に生活してみて、ウラとオモテがあれ程ちがう社会が本当にいやだった。

徳永　今、言っていることとやっていることが全く違うと指摘されましたね。「建前と実態の相違」これなんです問題は。これはどこの社会でも多少の差こそあれ見受けられる現象ですが、社会主義圏のそれは、非常に質が悪い。

真瀬　それで今日参考資料として『前衛』を読んできたんです。それによればそもそも「プロレタリア執権」というのは一つの階級あるいは複数の階級、階層の政治支配、あるいは国家権力を示すものであって、決して特定の個人や組織への権利の集中を意味しないということを定義していますね。ほとんどすべての社会主義国はそうなんですよ、建前としては。政治権力としてはプロレタリアのものだ、すべての人のため、全人民国家である。ところが現実は特定個人、特定組織へ権力が集中する。そういう中で嘘をついてきたんですよ。嘘をついてそれに庶民は耐えられないという状況がズーッと続いてきたんですね。

徳永　今年の二月五―七日のソ連の党中央委員会総会で採択された政治綱領。これは一党独裁制の放棄、複数政党制の採用、共産党の指導性の排除など党の従来の基本線を根本的に改正した画期的綱領なので楽しみに読ませてもらったのですが、党の特権の箇所でひっかかりました。こう書いてあるんです。「党の全ての不法な特権に反対し、完全に解放された社会をめざす。共産党員だからといって、それだけでいかなる特権も付与しない」。ところが実態をみてみると、一部大学、研究機関、報道、サービス関連組織への党関係者の臆面もない人事的介入は手控えられてはきているものの、庶民の手の届かない食料品から冷蔵庫、洗濯機、家電品、自動車にいたるまで、ごく一部の高級党員、官僚が自由に現地通貨ルーブルで安く買える特権ショップや、クレムリンから配給される広大な別荘は、従来どうりで全く見直されていない。あきらかに厳然と存在する特権を「政治綱領」では建前として否定しているわけで、実態に目をつぶって建前で押し切る従来の党員特有の傲慢さが未だにこの「政治綱領」にも見受けられるのです。特権が地位に付与されているのも問題でしょう。地位から離れれば特権も失うので、一度特権の有難みを噛みしめた人は死ぬまで地位にしがみつき、組織の老害化現象が起こる。

「各人が能力に応じて働き、必要に応じて得る光輝く共産主義は、今のところ、ほんの二〇名程度の人間のためにのみ実現されている」とエリツィンがその著書『告白』で内部告発しています。エリツィンのあげた特権の数々は私がモスクワにいたときにソ連の人々から聞いた事柄と大差ないので、すでに衆知の事実なのでしょう。ただ諦めの目で特権致し方なしと冷やかに容認していた大衆が、行動にでるようになったのは大きな変化です。先日事故を起こしたウクライナ党幹部ザイカ氏の車に、庶民の手に入りにくい食料品が満載されていたことに激しい非難の声がおこり、ザイカ氏は辞任においこまれました。特権は温存されつつ、目立たぬように地下に潜りつつある。特権ショップも目立たぬようにスペツィアールヌイ・ダカーズという仕出屋に変わりつつあるんです。

富森　仕出屋ですか？

徳永　そうです。特権ショップでは目立つので、注文をうけて品物を届けるわけです。

富森　注文は誰でもできるというわけではないのでしょう？

徳永　その特権を持っているごく限られた党・政府幹部が注文できるのです。多くは秘書を通じて注文するのですが、秘書も一族郎党も恩恵を受けています。

このような旧体制を温存した改革にたいし殊にアメリカの学者達の中にはゴルバチョフ改革の先行き短しとの評価も出ていますが、社会の徹底改革には、急進改革派だけではなく幅広い大衆の理性的な盛り上がりが必要です。まだまだ機が熟するまでにはいたっておりませんね。上からの規制の枠内での生活があまりにも長かった。信用できるものは枕だけ、その枕の中にも盗聴器があるかもしれないと生まれてこのかた常に疑心暗鬼に苛まれていたわけですから、社会には逆らわずに、長い物には巻かれて安息をもとめる生活姿勢が身についてしまっています。私がモスクワで仕事をしていた時も、現地の大学出の優秀な現地スタッフを事務所で使いましたが、命令したことはしっかりと行うが、それ以外のことは一切しない。西独、オーストリアでは、そして日本もそうですが、仕事を頼む時にはその仕事の目的をはっきり納得させないとなかなか動いてくれない。そのかわり事態が変わっても仕事の目的に沿って自己の判断でどんどん進めてくれる。ソ連では権限のないものには手を出さない、知らないことには手をださない、余計なものにも手をださない、そして指令されたことをやっている限りにおいて何の文句があるのかという姿勢です。これはおいそれとは変わりませんね。

真瀬　長い物には巻かれろ、それから言われたこと以外はやらない。しかし、個人的な自分の消費生活を充実させるということについては、実に一生懸命やるわけです。いわば個人主義というよりも利己主義というか、俺の物は俺の物、お前の物は俺の物、こういう人間が非常に作られやすい。社会主義政権のもとで大量にこういう人達が作られたような気がする。

徳永　そういう傾向は確かにみられます。利害の社会化というんですかね。それも自己本位の。国家社会主義では損益の社会化でしたが、社会主義的労働者自主管理となると損失は社会のもの、利益は労働者のものという傾向が出てきます。

富森　社会的所有とはなんなのかという問題になってくるわけですが、たしかに社会的所有というのは、社会を構成している人間みんなのものだということですが、現実には結局今先生がおっしゃったような、自分の物は自分の物、他人の物は自分の物という考えになってしまうんですね。

真瀬　勝康氏

真瀬　それで盗みをやるんですよね。ちょっと聞きたいんだけれども、そういうのはロシア的な遅れた思想なのか、社会主義特有の思想なのかどうなのかということを。昔は日本だって後進社会で例えば公徳心がないとか僕らよく言われたですよ。小学校の頃、「公徳心がない」「社会のものを大切にしない」これは日本の遅れたところだということを僕の子供のころ（昭和三十年前後）はいやというほど言われてたわけです。

工藤　公徳心ということを、ただ西欧の価値観からみて、そういってもあまり意味がないように思います。ちょっと話がずれてしまうかも知れませんが、ずっと話を聞いていて、経済のことはわからないものですから、最初、社会主義が「崩壊」したとして、それがどこへいくのかという問題が出されたとき、僕自身はこの議論はどこへいくんだろうかという気持ちがあった。それはなぜかというと、確かに社会主義というものに対するイメージが経済的なシステムにあるのかも知れないんだけれども、いま聞いていてもはっきりしない。結局話と言うのは社会主義経済と言うのは資本主義の目からみてうまくいかない、つまり社会主義圏（もう崩壊しつつありますが）では経済がうまくいっていないという話に基本

的には集中していくと思うんですね。ゴルバチョフがでてペレストロイカ、グラースノスチといった政策をやったときに、じゃあ社会主義はどういうふうになるのかという議論が起こってくるのは自然です。だけどそのときに、ぼくは社会主義経済、ないし社会主義圏の中に実際に行われている経済はこれこれの点でうまくいかないんだということで話を進めていけば、結局社会主義というのは、資本主義の経済システムからすると駄目だったんだというところへ落ちついてしまうように思えます。ゴルバチョフという人が出てきて、このあいだもサンフランシスコでアメリカの学生を相手に話したときに「太平洋は未来の地中海である」なんて言うことを言う。この地域でもってわれわれにはいろいろ学ぶことがあるんだという。

そのときに、ぼくは問題にしたい点が二つあるんですけれど、ひとつはゴルバチョフという人からみて、経済プログラムにおいて学ぶものが果たしてはっきりした実像としてあるんだろうか、という問題です。彼は学生の前で何を学ぶかという話をしたときに、日本と韓国を例にとって、太平洋圏においてあれだけの経済発展をした国に学ばなければならない。いまや経済は一国一国のレベルで（つまり一国社会主義のレベルでという意味だと思うんですが）考えては駄目で、人類は世界の経済発展というものを志向している時代なんだと言っている。そういう時にゴルバチョフという人は、果たしてさっき堀川さんからでましたけれど、経済のプログラムと言うんですか、つまり資本主義社会あるいは自由主義社会における経済のプログラムに対して、どれだけはっきりしたイメージを持っているんだろうか、そのところが、おそらく二点目につながることなんですけれど、ペレストロイカとグラースノスチという一連の改革を問題にするときにどうしても注目しなければならない点だと思うわけです。確かにゴルバチョフは評判が悪いですよね、ゴルバチョフになってから物がどんどんなくなっている。あいつはいろいろ言っているけどとにかく物がなくなっていくじゃないかという批判が大衆にある。早く物を持てるようにしろという要求はかなり根源的なところにあって、一方ではそれに耐えているように見える（少なくとも東欧に比べて）大衆が存在するわけです。そういうなかで、これまでブレジネフ体制の下で抑圧されていた、いわゆる「反体制」の知識人たちが、すくなくとも政治の表舞台で発言する機会を得てきている（もちろん全面的にというのではありませんが）わけです。しかしこうしたかつての反体制派の知識人というのは、いま述べたような意味でゴルバチョフを批判しているんだろうか、つまり物がないということで彼らが批判しているんだろうかということが二点目なんです。

そうして考えていくと、例えば一九五六年にスターリン批判があった、そのちょっと前ですね、核実験の競争が全面的に展開されようというときに、あのサハロフが自ら開発した爆弾の実験に立ち会うわけです。そこで実験をやってみると予想以上の威力があって、ひどい被害が出た。まさにソヴィエト市民と兵士の何人かが実験によって殺されるという事態。そのときにサハロフが、確かにショックもあったと思いますが、核実験で競争しても駄目だという提言を当時のフルシチョフにしている。そのときフルシチョフは、サハロフを名指しして、要するにおまえは何も判っていない、科学者であるおまえは爆弾を作っていればそれでよい、政治のことは俺たちに任しておけ。キャピタリストがいま何をやっているかといえば核実験をやっているんだ。だからケネディーがあれだけやっているときにキャピタリストにおくれて実験回数を減らすならば、もう社会主義は終わりだというわけです。そうすると、それから何十年かたった今、ゴルバチョフは、確かにそう簡単には言えないと思いますけど、いわゆる軍事力、ないしは核兵器のところで競うのは止めようと、少なくとも表向きは提案したわけです。だけどそれじゃ何で資本主義と戦っていくか

というときに、国民に対する説得の仕方としては、なんやかやと問題はあるけれども、ペレストロイカを押し進めていくことで、社会主義に市場経済を導入して経済的にどこまでできるかやってみよう、その過程で資本主義社会の経済システムから学ぶことがあれば学ぼうじゃないかというわけでしょう。そういう時に何か僕が感じるのは、サハロフは死にましたけれど、いわゆるかつての「反体制」の人々が代議員か何かに選ばれているときに、果たして資本主義的なプログラムにおいて物が豊かになるということはどういうことなんだろうかという問題が必ず出てくる。そういうところ、つまりロシア人が今後、物の消費とか、もっと漠然と言えば進歩とかというものにどう対応していくかというのを見ていかないと、今真瀬さんから出たような問題、ロシア人の資質とかなんとかというのは見ていけない。

ペレストロイカ、グラースノスチでよかった点は、少なくともサハロフのような、これまで幽閉されていた知識人たちが、一応代議員か何かになって物を言うところですが、そこから彼らがどういうプログラムを作っていくのかということの方が興味があります。そのあたりで僕は、社会主義のイメージというのが、ただ計算がうまくいかないのが社会主義だといったような反省の仕方では、現下のロシアで展開されている諸政策の本質とのかかわりで、なかなかはっきりとはつかみきれない、そんな感じがしてるんです。

富森　最近よく言われるのは、資本主義が勝利して社会主義が敗北したという言い方ですね。あれは非常に危険だと思うんです。この座談会の第三番目の柱は、「社会主義はどこへ行くのか」でしたね。その行く先は、人間が人間として、精神的にも物質的にも豊かに生きていける社会であるべきです。もちろん物質的に豊かすぎる今の日本の社会がすべていいかというと、そうではない、経済の発展だけが万能ではないことはいうまでもないことです。ただ工藤先生に反論するわけではないけれどあえて、物質的という言葉を入れたいのです。我々は経済的に非常に豊かな国に住んでいるんです。ソビエトやポーランドなりに行ってみると、若者たちの苛立ちをすごく感じる。もう戦後四十五年もたっているじゃないか、どうしてこんな経済なのかと。ソビエトやポーランドの経済の現状は、一九五〇年代末頃の日本のそれとほぼ同じか、場合によってはそれより悪いかもしれません。世界には経済的に豊かな国が沢山あるわけでしょう。それをみてしまった彼等にとって、自分の国の物質的豊かさの点での立遅れは切実に感じるし、人間やっぱり経済的に豊かになりたいという欲望は自然だと思うのです。もちろん工藤先生がいわれたように、物質的豊かさだけがすべてではないという問題を考える必要がある。更に、今は特にエコロジー問題を如何に解決して行くかが、問われている。つまり現実は地球的規模ですべてを考えねばならぬところへ来ているということです。だからこそ、社会主義の敗北とか、資本主義の勝利とか簡単に言えないのはそこだと思うのです。人間が生きていく社会として全く新しい理念の形成、このあたりがこれから二十一世紀にむけて問われていくのではないかと思います。イデオロギーの次元ではない、人間一人一人が尊重される社会を現実に如何にしてつくり出していくか、その意味で二十世紀最後の十年は極めて大事じゃないかな。

堀川　しかしどうなんでしょうかね、歴史的な事実判断の問題としては、真瀬さんが先程言われたような社会主義、現存の社会主義ですけれども、それは人間性を堕落させ、嘘つき、たかりとか、利己的なそういう人間を作り出していく。そうでなければ生きていけないということがあるかもしれないですけれども、それに対する怒り、嘘のシステムというか、人間性を破壊するシステムに対する怒りが根底にあるということでしょう。

資本主義か社会主義かという問題について言えば、資本主義にもいろいろあり、合理的な資本主義もあるし、いろいろあるんですが、

相対的に見れば合理的な人間といいますか、自立的な思考判断をもっている人間と言いますか、そういうものを作る上での競争からいえば資本主義の方が相対的に社会主義に対して勝ったんではないかという気がします。

真瀬　僕はいっぺんそこで資本主義か社会主義かというふうに、資本主義の勝利だとか社会主義の勝利だとかという議論にいくのはまずいと思うんです。やっぱりきっちり社会主義を総括しなければいけない。というのは社会主義というのは思いおこせば、人類解放の思想だったんでしょう。ところが革命に成功して出現したのは社会主義の理想とは似て非なる社会に変質してしまったわけですよ。

それからゴルバチョフが今経済改革するという理念が単に資本主義的な物質的豊かさをソ連においても実現するなんて言った。ところが彼は共産主義者なんでしょう。一応、共産党書記長なんだから。あまりに思想の貧困というか、なんていうか。

工藤　日本を見習うという発言というのは、もちろん彼自身の思想が共産主義者であるかどうかという問題よりも、実際に物がないというところからでてくるわけでしょう。ただし日本の場合にも言えると思うんですけれども、ロシア革命でもどこから出てくるかというと、貧困をなくすということですよね。当時のロシア帝国の中で徹底的に農民から搾取された富は全部教会権力、国家権力に集中していって国民の側にはなかったわけです。だから社会主義にはそれを、要するに貧困をなくすという意味での理念というのは当然あったわけです。だけれども、そういう意味で貧困を一番なくしうるシステムというのが、実は歴史の現段階にいる我々が考えられる限りでは、資本主義しかないというか、貧困をなくすという意味ではむしろ社会主義革命よりも要するに資本主義的な経済システム、具体的には例えば日本のような成長した国家の経済の方がむしろ合理的なのではないかという認識はかなりはっきりしてると思うんですけれども。

徳永　彰作氏

真瀬　ちょっと違うと思うんだよね。だからそういう意味での貧困というのは社会主義は解決していたと思う。キューバの悪口をいうと、黒人あたりから批判されるけど。

富森　中国だって十一億を食べさせているんだから。

真瀬　今どうかなという気はしますけれど、ただ問題なのは名もなく貧しく美しく、貧乏でも美しければいいんだけれど、今の社会主義というのは貧しく汚いんだよね。先程富森先生がトイレの比較をしたのはすごくいいと思うんですよね。トイレが汚いんです。ユーゴに留学する時、先にイギリスに行ったんです。その時あるイギリス人から、お前はこれからどこへ行くのか、と質問されたんです。ユーゴへ留学すると答えたら、イヤな顔をするんですね、私も一ぺんユーゴに行ったがトイレがすごーくきたなかった、なんて話をするんですね。この人はイギリスの普通のオバさんなんですけれども、彼女のユーゴのイメージは不潔なんですよ。不潔な社会を作っちゃったということなんですよ。これはすごく問題だと思う。

貧しさやなんかというと、例えば日本でもペレストロイカとかソ連なんかに反対の人達なんか、要するにゴルバチョフは資本主義を知らない。資本主義国で闘っている民主勢力は資本主義を知っているんだけれどもそういうことを知らないでやっていると。そういう批判になっちゃうんですよ。そうではなくて問題は二〇世紀にとって社会主義というのは、確かに農奴を解放し、人民に文字を教え、軍閥もなくしたですよ、特権階級を追放したわ

けですよ。帝政を打倒したわけですよ。ところが出てきたのは結局なんだったのかということをもっとマジメに受けとめなければダメだと思うんです。

徳永　社会主義が何故この様な結果に、ことにアンチテーゼとしての資本主義先進国の経済成長、経済水準にかくも格差をつけられる結果になってしまったか、ということに関連したことなのですが、資本主義の流れからみれば、社会主義創設の意義殊にその前段階の展開があったからこそ、それに対応あるいは対抗しての切磋琢磨もなしえたし、その後の第一次、第二次オイル・ショックの試練を乗り越えて質的展開、特に技術面での躍進とそれにともなう体制改革、機構改革をなし遂げえたと思うのです。ですからマルクス、レーニン、スターリンの資本主義観とは似て非なる怪物に成長してきたわけで、これへの認識が全く硬直化していたこと、フルシチョフも当時のソ連経済のごく目先の予測のもとに、むこう一〇年間でソ連経済はアメリカに追いつき追い越すであろうと豪語した程度の現状認識、そして更には労働者主体の社会主義国家が一握りの新しい階級による圧政統治国家に変貌し、やるきを失った労働者大衆を把握しきれずに、エリツィンの言う二〇人ばかりの上層部のみが共産主義を謳歌しているような社会にのめり込んでしまったこと、そしていまだに政治家の一部が、政治とは如何にあるべきかをも認識しきれずに、国民生活をここまで追い込んだひび割れた党の党利、党略と自らの特権保持に汲々としている現状では、改革が革命へと変貌する起爆剤を自ら大事に抱え込んでいるようなものでしょう。社会主義の歴史的評価と現状へのアプローチは当然のことながら仕分けして考えなければなりません。

先日福岡で社会主義経済学会が開かれたのですが、その席で社会主義経済学会の名称から社会主義をとって、比較体制経済学会としたらばどうかとの提案がなされて、それに関連しての様々な見解、立場が披露されました。社会主義の歴史的意義の評価、社会主義の存在意義、現社会主義への評価、社会主義不要論、社会主義のあるべき姿、社会主義の宿命等々それぞれの課題に更に様々な視角からのアプローチが複雑に絡み合い、結局は平行線にのったまま時間切れとなりました。

工藤　ただロシア革命から七〇年、八〇年代ですか、その七〇年間のソ連を中心とした社会主義圏の経済、システムというのは明らかに歴史的に実験されてきている。その中で社会主義の理念はとにかく置いておいて、具体的な経済の展開としてだめなんだという認識というのはあるわけでしょう。現段階、ソ連、ゴルバチョフにおいてもあるわけでしょう。それで例えば経済改革をいろいろやろうとしているわけですよね。だから貧困を一番最小限に留めるシステムとして何がいいかというレベルの問題だと思うんです。経済システムとして。その時に経済のシステムをどう具体的に変えていくのかということと、社会主義の理念がどうだったかということは一応別の問題じゃないですか。

堀川　しかし社会主義は少なくとも一面においては経済システムの概念をもっていますから、人間性の解放とかそういう理念的なものは、社会主義の目標としてあるわけだけれど、どんな経済システムでもいいというわけにはいかない。社会主義には固有の経済システムというものがあって、それがなくなれば社会主義ではないという基準的なものがあるんじゃないですか。

富森　それは資本主義の経済システムそのものに対する批判からくるわけですが。その点に関しマルクスが十九世紀の資本主義批判として、つまりその否定として論理的に描いている社会主義経済システムといわれるものは極めて単純化され非常に楽天的に描かれています。それを社会主義固有の経済システムであると考えるのは極めて危険です。私はマルクスを全面的に否定する気はありませんが、マルクスは社会主義の青写真を作ったとは思っていませんから。私は学生に何時も言って

いるのですが、マルクス自身が常にいっていたのは、自分自身が生きた社会しか自分は分析の対象には出来ないのだということです。社会主義社会は二〇世紀に形成された社会です。二〇世紀の社会分析に責任があるのは二〇世紀に生きている我々です。残念ながら「社会主義経済システム」の理論化は非常に遅れています。

徳永　やはり理論それ事態現社会にふまえて見直す必要もあるでしょうが、先程話題に上ったように、理論と実態があまりにもかけはなれ、労農国家のあるべき姿よりも国家が限られた指導者の権力行使と権力闘争の場となり、あたかも労働者を搾取するような実態にいたったことが大いなる錯誤でしたね。

富森　何故、そうなったのかということ。いわゆる官僚制とか。

工藤　だからそれが歴史的に見た社会主義経済なわけでしょう。歴史的に見て・・。

真瀬　現実に存在しているということですね。

工藤　例えば今のソ連でもいいし、東欧でもいいけれども、若い人達が求めているものを与えるという場合になった時に、与えるシステムというのは何なのかということを、社会主義圏の人たちが考えたとき、要するにどういうシステムが可能かということですね。

徳永　それにはそれぞれの国の生きざまが出てくるわけなんですよ。だから社会主義の枠内でそれを民主化して人間の顔をした社会主義にもってゆこうというのは社会主義をベースとしたアプローチですよね。ところがもう東独あたりは社会主義を完全に捨てて了った。それが両極端にいて、その間にいろいろなバリアントがでてくる。社会主義はどこに行くかの問題もこの面から見る必要がありますね。

真瀬　資本主義のことに戻すと、例えば資本主義国の労働運動だって、歴史を作る主体として労働運動というのを考えると、資本主義の労働者も何をやっていいかわからなくなってきているというのが事実なんでしょうか。別に社会主義がだめになってしまったからということよりも、イギリスの労働運動なんかは特にそうなんですね。例えばサッチャーが出てきて経済改革をするわけですね。サッチャーが出る前にすごいストライキがあったわけですよね。ある意味では革命前夜ぐらいな労働運動の盛り上がりがあったんです。それが全部潰されるんですよね。サッチャーだとか中曽根だとかレーガンですか、あの経済政策の核心部分というのは何かと言ったら、管理体制の強化なんですよ。社会主義運動はこれと闘い、しかし負けるんですよ。負けた時に一般大衆は何を選択したかといったら、むしろ管理体制強化の方を支持したわけですよ。これをもっと極端な形でいうと、例えば日本の国鉄の改革なんかみていると、管理体制強化に、もちろんそれに抵抗している人達はいますよ、中にはいますけれども、主流は管理体制強化でやっているわけですよね。それから社会主義の方でも民主主義か民主化かという問題も出たんですけれども、例えばルーマニアの民衆が民主主義、資本主義に戻るんだといった場合、彼等が望んでいるのは自由で平等な社会主義社会じゃなくて、むしろ資本主義みたいに管理されたいという感じでてるんじゃないのかな。そこらへんのことについて今までの我々のものさしで計れないような状況がおきているんじゃないのかなという気がする。

　例えば資本主義の問題、貧困なんていう問題が出ましたけれども、例えばアメリカなんかには貧困というホームレスなんていうのがあるわけでしょう。あれは確かに資本主義が生み出したものだけれども、搾取の対象じゃないですよね。彼らは働く気がないんです。本来だったらああいう貧困は搾取のためにあるわけで、もちろん細かくいえば違うと思うんだけれども、まさにアメリカの経済が不況のどんぞこから好況への過程で何もしない人が、大量にホームレスみたいかたちで出てくる。これは明らかに単に今までのマルクスの窮乏化法則とはちょっと違うような状況が出てるんじゃないかなという気がします。そういうものさしで、資本主義も悪いところがあ

るんだから、社会主義ばっかりを問題にしても意味がないんじゃないかなという議論になると、相変わらず社会主義か資本主義かというものさしで見てしまうことになるんじゃないかな、これでは思考の停止になる。

徳永　ものさしで見る危険性、痛切に感じますね。我々がソ連の政治・経済情勢をみる場合、一寸油断をすると、我々の尺度でみてしまうケースが出てきます。殊にアメリカ人のソ連観にはその傾向が強い。ブレジンスキーなどはその最たるものでしょう。ソ連は、何もアメリカや日本の尺度で生きていくわけではないのです。同時に日本もアメリカの尺度で働いているわけでもありません。ソ連も日本もアメリカにもそれぞれ自分の生きざまがあるわけで、まずそれを理解したうえでの実態把握と対応が肝要ではないかと思うのです。そうは言っても、また話はソ連に戻りますが、今回のゴルバチョフの大統領選や政治綱領採択の流れにしても、何かふっきれない線があるんですね。すでに、最高会議議長、党書記長、国防会議議長の中枢ポストを掌握し、十分過ぎる権力を行使できるのに、なぜ今更大統領制を持ち出したのか、それも十分なる大衆討議をへて、直接選挙による選出への強い要望を無視して、ごく限られた人民代議員大会で決めてしまったのか、大統領候補に推薦されたルイシコフ首相やバカチン内相を急遽辞退させ候補者をゴルバチョフ一人にしぼることのできた背景は、等々ゴルバチョフ特有の手腕と、なにやかやと批判はしながらも、究極的には権力者に対するソ連政治家の迎合姿勢が窺えてなりません。大衆は聾桟敷に置かれてあれよあれよとあっけにとられているうちに、上からの押しつけで決められてしまった。ウスカレーニエ（加速化）とはこういうものなのか。そしてこの大統領の権限は、世界で最も権限が強いといわれているフランス大統領の権限に匹敵するほどの、いわば分立すべき三権を一手に傘下に収めたようなものです。更に言わせてもらうと、強い権力をもったフランス大統領とソ連のそれとの相違点は、フランスには滅多な権力行使を許さない議会と強力な野党とそして見識のある一般大衆が存在しているが、ソ連の社会はまだそこまで到達していない。対応をあやまれば恐ろしいことにもなる可能性があるのではなかろうか。

堀川　ゴルバチョフの場合どうなんでしょうかね、形式的な意味での権力はすごく集中して、ほとんど絶対権力に近い権力をもってますけれど、それでもいうことを聞かないわけでしょう。全体が。彼が何やっても。

真瀬　今ソ連に話が集中してしまっているんですけれども、東欧自体はそんなに簡単じゃないと思うんですね。今共産党政権らしいので残っているのはわずかにユーゴの一部とルーマニアの救国協議会ぐらいですよね。あとはみんな、東独にしろポーランドにしろチェコにしろハンガリーにしろ、かつての政権政党である共産党はおしなべて政権をなくしてしまったわけですよね。僕は富森先生にお聞きしたいんですけれど、ポーランドなんかで本当に支配しているのは一体誰なのかということがすごく気になるんですね。

　ポーランドの改革の流れというのを見てみると、連帯がでてきたのは一九八〇年ですけれども、それ以前七六年ぐらいに暴動が起こるんですよね。それで連帯の下地ができて八〇年に連帯がでてきて、それがつぶされるんですよね。連帯がでてきた状況というのは下からの革命だと思うんですよね。あれに武装蜂起があればもうソビエト革命ですよ。労働者自身が闘うわけですから、共産党の支配する社会でソビエト革命がおこる、それが戒厳令で抑えられるわけですよね。その後何年かうまく小康状態が続いていったけれども、それがうまくいかなくなって、自由選挙というんですか、それをしたら一挙に連帯政権ができ、東独では社民党とドイツ連合の政権ができチェコでもそうである。だけどもあそこでやっているのは議会なんですよね。工場や政府機関を握っているのは誰なんでしょうね、ポーランドでいけば誰になるんでしょうか。

富森　それに答える前に、先程工藤先生から指摘のあったサハロフの言葉は非常に印象的でした。全体として話が少し経済のことに片寄り過ぎたように思います。

さてまたポーランドの話になりますが、まず最近のポーランドの経済事情にふれておく必要があります。先程ユーゴスラヴィアのインフレの問題が徳永先生から指摘されましたが、ポーランドも同様で、とりわけ一九八二年、八八年のインフレはひどいです。為替レートも三年程前は一ドル＝五〇〇ズロチでしたが、今年の三月には一ドル＝九五〇〇～九八〇〇ズロチ（これは実勢に合わせたもの）なんです。余談ですがそのお蔭で今回の労働調査の為の滞在では私たちは楽な生活が出来ました。ものすごいインフレでポーランドの人たちは生活が大変なんですよ。去年の九月まではインフレにスライドさせて賃金をあげてきましたが、今年にはいってからは、賃金引上げは低くおさえられています。

今年からバルセロヴィッチプランという大蔵大臣の名前をつけた経済政策が施行されました。このショック療法で、この最近はインフレが月率四％位に落着いてきたようです。その前はすごいんです。一九八九年には、月率九月～二九％、十月～四三％、十一月～九〇％でした。年率にすれば一三〇〇％です。こういう経済危機の中でもポーランド人は明るいんです。なぜかというと自分たちが選んだ連帯主導の指導者がいるというのです。少なくともこれ以上悪くなることはない、なにかよくなるという期待が彼等にはあるようです。ただこの我慢が将来何時まで続くかという点が心配です。インフレも落ついてきたので少しいい方にいくのかなという希望的観測をもってはいますが、とにかく好転の兆しがみえてこないと。最近、生産の急激な落ちこみで解雇が気になり出したウッデの繊維労働者、ミルク価格が安すぎて生産コストにも見合わないと怒った農民らのデモなどが多発していますし、大蔵大臣バルセロディッチの支持率が急速に落ちているのが気になります。

それで先の工場、政府機関を誰が握っているのかという点ですが、ポーランドの場合むずかしい局面にきているようです。連帯主導型の政権になったということは、自分たちがもろ政権にはいってしまったわけですから、労働組合という立場を維持していくことがむずかしいという矛盾が出てきているわけです。また連帯内部でも、六月頃から知識人と労働者の間の矛盾もはっきり出て来ています。

企業のなかへはいってみると以上の点がもっと具体的にわかります。私どもが労働調査にはいった工場の一つには選挙で選んだ社長がまずいます。もちろん連帯労組と官製労組あり、その他に自主管理機関があるんです。一体何処に如何なる権限があるのか、また責任があるのかわからないといった状況です。

徳永　ポーランドの企業の中でいわゆるマネージメントの権限を持っているのは誰なんですか。

富森　その点に関しては私どもも具体的に聞いてみました。例えば非常に古い機械を使用しているが、これを新しい機械にとりかえる時、誰が最終的に決定するのかとたずねてみたんですが、両労組の意見を聞き、自主管理機関が決定するという優等生的返事が返ってきました。しかし現実には権限と責任の主体はあいまいです。過渡期だからという気もしなくはありませんが、今まで社会主義でいわれてきた労働者自主管理とは何であったのか、理想的な、企業内労働組織があるのかという疑問も出てきます。

徳永　自主管理企業の動きをみてみますと、例えばユーゴスラビアでは、企業経営の基本的事項は、建前として労働者評議会が決定し、それを執行機関が実施に移すということになっていますが、実際面で物事がうまくゆけば問題はありませんが、うまくゆかなかった場合には、執行機関は労働者評議会の決定内容を批判し、労働者評議会は執行機関の実施のやり方に文句をつけ、色々と遣り取りはするが、結局は責任の所在が曖昧となり、宙に消えてしまうことになる。要するに、労働者自

主管理は「権限と責任」が明確化されていない組織なのです。今回のマルコビッチ経済改革では権限を有するものは必ず責任をとるよう義務づけています。この改革で生産手段の所有の自由化が認められたので、責任は権限執行者たる企業長に移ってきています。

真瀬　僕は東ヨーロッパのことに話題を変えたのは、今の東ヨーロッパの改革というか政変というのは資本主義でもきちんと社会党とかに政権を一時期預けてちょっと中継ぎしていただいて、そういう感じがするんです。それで先程徳永先生のユーゴの経営組織が権限だとかわからなくなっていく構造だとおっしゃられたけども、ユーゴなんかでは、しっかり汚職をし盗みをし、そういう部分もいるわけでしょう。そういう体制の中で甘い汁を吸っている人達が人民の血を吸っているわけですよ。そういうのは今はポーランドでは無くなってるんですか。

富森　無くなってないですね。

真瀬　そうしたらどこにいるんでしょうかね。

富森　それがなくなるにはまだずい分時間がかかると思います。現在はおおっぴらに誰それはノーメンクラトウラ（ノーメンクラトウラとはもともと「リスト」を意味するラテン語だが、社会主義国家の新しい支配階級をさし、彼等は様々な特権をもっている）だと言っています。私どもが労働調査にはいったもう一つの工場はトップにそれがいるんです。結局私どもがいるうちにはそれはなかったんですが、そのノーメンクラトウラを追い出すためのストライキがあるらしいというデマが飛んでいました。もうみんなおおっぴらにやっているわけですよ。

徳永　ユーゴスラビアも建前は自主管理でありながら、実態は自主管理無視の政治がらみの企業長もいるわけで、これが官僚と結託して、利権と賄賂がらみのかなり悪いことをしている実例も多い。最近倒産したアグロコメッ社などはその典型です。労働者による自主管理といっても、そういうことも許される自主管理なのです。

富森　現在の程度の問題もありますが、どんどん皆は口に出していいますし、時間の問題だとは思います。ソビエトはどうなんでしょうね、そのへんがゴルバチョフの一番頭の痛いところでやはり官僚組織みたいなものがが

工藤　孝史氏

っちりでしょう。ソビエトは歴史も長いし、その前のロシアの文化もありますし。東欧諸国とは大分その点違いますね。だからそういう意味では一番大変なのはソビエトだと思います。それまでゴルバチョフがもちこたえられるかですね。

堀川　つまり社会主義というのは集権的経済体制のもとでも人間性が腐敗するし、自主管理的な経済でも腐敗する。昔は国権的社会主義に対するアンチ・テーゼとしてユーゴスラビア的な自主管理の理念というものが、フランス社会党なんかもそうですけど、自主管理思想というのが出てきたわけですけれども、お話を聞いているとユーゴ的な自主管理もいわば、ぶったくりの行動と言いますか…。

徳永　そういってしまうと身も蓋もないが、だからこそ自主管理制度を見直して経済改革を実施しているわけです。

堀川　その経済改革の動機というのはどこからでてくるんでしょうかね。ぶったくってる連中というのは、今の体制の中で上の連中もたかっているけれど、下の連中もたかることができるわけでしょう、それなりに。ソビエト的なシステムでも。

徳永　経済改革の動機は、やはりユーゴスラビアでは先にのべた経済の低迷から如何にして抜け出るかの模索でしょうね。そして経済の低迷をもたらすものとしての自主管理制度

に改革の矛先が向けられたということでしょう。先程問題となった「権限と責任」の曖昧さ、過度の分権化、経費と時間の浪費などのもたらす自主管理制度の非効率性や企業長の経営能力の欠如と官僚との馴れ合いなどから生ずる経営不振が自主管理労働者の生産意欲を阻害し、益々企業の業績低下をもたらすといういわば悪循環減少が起こっていたのです。下の連中も当然のことながら、本業を疎かにして副業に精をだす。本業を疎かにして給与をもらっていれば給与泥棒であり、都合がつけば副業の原料を企業から失敬することもある。ソ連においても、モスクワでかなり有名な家具造りの老人がいて一九世紀スタイルの手作り家具を外人相手に売りさばき外貨を稼いでいました。本当にこれがソ連人の作った家具かと目を見張る程のビーダーマイヤー・スタイルの立派な家具でした。あなたの工場で作った家具は?と聞くと彼はニヤリと笑って傍らの横から押せば崩れるような一見粗製乱造な家具を指差しました。彼はペレストロイカは絶対反対という。何故ならばペレストロイカにより本業の家具工場からの原料木材の無償調達が不可能となり、副業がペレストロイカで表にでれば、税金に追い立てられることになるからという。

堀川　工場資材を持ち出したり、アルバイトしたり、労働規律がそれほど厳しくないからバイトできるとか楽できるとか、そういう形でつまり純粋な被害者というのは社会の中で存在しえないわけですよね、どこかで完全に一〇〇%の被害しか受けてない連中というのはそんなにいないわけでしょう。

真瀬　被害があるんですよ。老人でしょ、年金生活者、学生、青年、女性と。そうすると一体社会主義というのはタテマエばかりということになるんですよ。

徳永　それと国家がかなりの被害を受けていますね。だから人民は割に楽な生活も可能なのですが、国家は貧しいですね。モスクワの公共交通料金は、トロリーバスが四カペイカ、地下鉄が乗換自由で五カペイカ、日本円にして一〇円前後の値段です。実際の維持経費との差額は国庫負担です。その他、食管費、医療・教育費の国庫負担も大変な額でしょう。ユーゴスラビアでは自主管理企業の赤字は説明が立てば、自主管理擁護の名目で国からの補助金をうけることができましたが、本年一月よりの経済改革でかかる企業補助は打切りとなりました。

堀川　この間テレビのニュースでみたのですけれど、ある労働者へのインタビューで、彼は俺はペレストロイカに反対だと言うんですね。ペレストロイカをやられると今みたいな仕事をちょっとさぼってアルバイトができるとか、工場のものを持ち出して売っていくとか、工場の電話を自由に使えるとかができなくなる。で、それが下部労働者でも、上部ほどうまい汁は吸えないかもしれないけれど、現在のシステムの中でそれなりに抜道があるわけですよね。そういう連中からは経済改革の導入というのは出てこないわけです。全国家的な利害を考えるということはないですから、大衆のレベルからいえば。

真瀬　ものにははずみというのがあるからね。ルーマニアとかはそうだと思うんですよ。

富森　民主主義というものが非常に美しく清いものであるという理念があったから、そういうものに対してものすごく集中するんだけれども。資本主義だっていろいろあるわけですよ、リクルート事件のようなことが。人間社会の中にある制約みたいになってしまうけれど、組織というものが常にもつ危険性というものが、いわゆる主義を問わずあるんじゃないでしょうか。

真瀬　だからそういうことになってしまうと、共産主義だとか社会主義運動だとか命をかけてやってたわけでしょう。そうしたら、なんだ作る社会が汚職と役人天国の社会というのでは全然力が入らないじゃないか、ということになる。僕は最近ブレジンスキーの『大いなる失敗』を読みました。読んでみて非常にいい加減な本といってはひどいんですけれど相当独断と偏見に満ちあふれているものなん

ですね。しかしあれはただ単に偏見と独断に満ちている本だ、うそも多いということでのみ読んだのでは本当の意味はわからないんですね。僕はあそこの中で一つだけ本質をついているところがあるというふうに思ったんです。それは要するに共産主義運動が世界史的な力をなくしてしまっているとブレジネフスキーは言いきっているんです。大衆運動の先頭に赤旗がひるがえってない。「共産主義は深刻な危機におちいっている。政治権力のシステムとして依然強力であるが、共産主義思想は死んだも同然である。この思想はもはや政治活動の引金になることはないし、世界史に残るような大衆運動をうながすことはない」ということで、例えばソ連は別にして、少なくとも東ヨーロッパの今の大衆運動を見てみると宗教ですよね、本来ならば社会の不正と闘うのがマルクス主義であり、社会主義・共産主義であったんではないか、そういうところからすごくはずれてしまっている。そういう意味で経済的な危機よりもやはり思想の危機という観点から今日の事態を考えるべきです。そこでマルクス主義の意義を考えてみると、マルクス主義というのは世界を、あるいは資本主義をプロレタリアの力で粉砕するわけでしょう。決して暴力革命とかが自己目的ではなくて、大衆の力で資本主義社会を倒すというのがマルクス主義の核心というわけですね。その際に重要なモメントになっているのは大衆の心をつかむということですよね。ところがソ連・東欧の現状をみると体制は大衆のココロを全くつかんでいない。これは驚くべきことで、社会主義建設に大衆の主体的参加のない社会ができあがってしまったのです。まさにマルクスのめざしたことと正反対のことが出現したわけです。だから資本主義にも悪いところはある。共産主義にも悪いところはあると論点をぼかしてしまうと、かつてマルクスが言ったであろう体制変革の熱い心というのがなくなってしまうんじゃないかというふうに感じています。

富森　実はそういう風に誤解されると思っていました。今のお話に続ければたしかに階級をなくすはずだったんですよ。理念的には。階級社会をなくすはずが、新しい階級社会をつくり出してしまったということになるんです。ただ、それだからと言ってロシア革命とその後の七〇年の歴史がすべて無であったとは言えないと思います。先程徳永先生が指摘されたように資本主義国における労働運動の昂揚をもたらしたし、また北欧福祉社会誕生へのインパクトにもなったと思います。ここで私が何よりも強調したいのは、法的に男女の平等が宣言され、男女の社会経済的平等が少なくとも理念的に最初に確立されたのはソ連邦においてだということです。その後の女性解放運動の展開、現代スウェーデンにおける女性の地位を考える時この事実は否定し得ないと思いますが、ただソ連邦のこの七〇年の歴史の大部分は、この点でも反面教師的側面が強かったですがね。ともあれ、ロシア革命以後の七〇年の歴史の結果として現在があるということです。この七〇年間を社会主義と呼ぶか、何主義と呼ぶかは別として、この現存の社会のうちなる矛盾として、新たなる階級社会ができたのだと思いますから、じゃあ、何故出来てしまったのかをもっとつきつめなければならないのではないでしょうか。

真瀬　社会主義体制があったから資本主義が改革できたというけれども、例えば北欧の社会、福祉社会というのを作ったのは別に共産主義運動でもないし、社会民主主義運動だと思うんですよね。資本主義内でブルジョワ勢力と括弧つきかなに付きかわかりませんけれども、少なくともソーシャルデモクラシーがやっているわけですよ。そういう意味で社会主義があったから資本主義にいい影響を与えて、あるいは競争上やらざるを得なかったという論法で北欧福祉国家の誕生について言われますとすごく月並みになってしまいますね。

富森　私はもっと理念的に、だからどこの政党が、社会民主主義的な政党が、やったとかやらないではなくて、その意味ではないもっと・・・。

真瀬　確かに社会主義七〇年の歴史というのは意味があったと思うんですよ。だけど僕個人として、あるいは多くの現在ソ連だとか東欧だとかに住んでいる人の意見というか感じで言わせていただくと、やはりそういう社会に対する社会科学的な「認識」と大衆の実感は違うと思うんです。七〇年間もそういう社会に住むなんて息がつまると思う。

富森　理念としての資本主義を乗り越えるという意味での社会主義で、最初はそうだったと思うんですよ。ソビエトだってロシア革命の理念は。

真瀬　ちょっと富森先生のはちょっと違ったんじゃないかな、ようするに社会主義体制があったから、資本主義にいい影響を与えたという・・・。

富森　それは誤解です。

真瀬　スウェーデンの福祉社会を作ったのは僕はスウェーデンの流れ的な発展というか矛盾の結果でてきたと思うんですよ。それだけじゃないと言いたい気持は判りますが、やっぱり多くの逆にスウェーデンの人に今の社会主義体制があったからできたんだと言ったら、それはちょっと・・。

富森　もし私が社会主義体制と言ったのでしたら誤解を招いたと思います。そうではなくて、マルクス自身にしても、更にもっと戻れば空想的社会主義者の理念を受けついでいるわけですよ。階級社会のもつ問題点を提起して、階級のない社会をつくり出そうとした理念、そういうものを言いたいわけです。

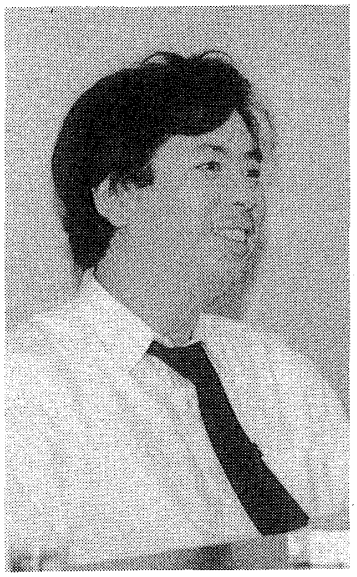
真瀬　まだ大統領になる前のハベルがマルクス主義についてマトをえた発言をしていますね。彼はマルクスの言葉というのは「社会機構のある隠された面全体に光を投げかけたのか。それとも後の恐ろしい強制収容所すべてのひそやかな芽ばえにすぎなかったのか？おそらく同時に両方である可能性がいちばん大きいでしょう」と言いきっています。社会主義の美しい理念の中にだって歴史的恐怖に通じる危険性があるのではないでしょうか。この両義性を見なければならないでしょう。大体、現在の東欧民衆にとっては社会主義＝全体主義なんですよ。さらに付言すれば、一九一七年に革命が起きてレーニンが死亡したのは二十二年ですか、そうするとたったの五年間ですよ。この五年間が正しくて、後残りの六十五年間が間違いではすまされないでしょう。今日のソ連・東欧の惨たんたる状況を生みだした歴史の原点として、ロシア革命ひいてはレーニン主義、レーニン統治の五年間だって当然批判的に研究されるべきですね。

堀川　国民に、飯が食えない国民に飯を食わすことができたという話が最初に出ましたけれども、それはいろいろな方法でやるわけですね。日本だったら国家主義的な方向でやるし、韓国も国家資本主義的な方法でやるし、ソビエトはたまたま国家社会主義というような方法でそれをやれた。ただそのあとの結果を見れば、そのあとの社会主義というのは結局個々の人間の人間性といいますか、モラルをだめにするような方向に進んでいった。それから見れば西欧型の資本主義の方が、歴史的な伝統が違うのかもしれませんけれども、権力と責任がある程度、徳永先生が言われたのは何でしたっけ、権限と責任ですか、少なくとも原理的な面でいえば権限と責任がはっきりしている。権限のある奴は責任もとるという形で人間性自体も陶冶されていくような仕組みができてくる。だから、資本主義と同じような矛盾が社会主義もあるし、社会主義がもっているような人間関係のいろいろな矛盾は資本主義にもありますけれども、同じ人間社会一般にあるような矛盾はあっても、一方ではメシをたくさん食えるのに、他方ではそうではない。あるいは一方では嘘は少なくとも公然とは通らないのに他方では通っていく。というふうになれば、何のための社会主義かというのがでてくるんですね。

富森　社会主義ということばの問題もあるんです。我々が社会主義といった時に何を考えているかという。理念としての社会主義なのか、「社会主義国」の七〇年の歴史なのか。話は変わりますが、先程からソ連・東欧の今後

は個々違った方向が相当出てくるのではないかという話になっていますが、例えば民族問題一つをとってみてもそれぞれ違う。ユーゴスラヴィアはある意味ではソビエトと似た問題をもっている。しかしポーランドは人口こそ三八〇〇万人いますが、民族的には比較的まとまりやすい、ソビエトはそもそも十五の共和国による連邦ですし、一二八もの多民族国家です。だからゴルバチョフも大変です。それにこの七〇年間の否定的側面が、全部重なり合って出てきているのですから、ペレストロイカは上からの革命ですし、これから改革の中心になるべき労働者が働いても働かなくても同じ賃金なら働かない方が得だと長年やってきたわけですから、変わっていくにも時間がかかりますね。それにひきかえ、ポーランドの場合は、上からの改革ではなく、連帯運動以来下からの改革のそれなりのプロセスをもっていますから。

徳永　一口に東ヨーロッパ諸国というけれど、それぞれの国は歴史、国民性、経済の発展段階、民族問題等かなりの差があるんですね。ユーゴスラビアのチトーが一九四七年に、「だから社会主義諸国といえども、それぞれの国の実情に則した政治・経済体制が出てくるのは当然だ」と述べたのが、当時、ソ連東欧諸国間の、緊密なる「一枚岩」を提唱していたスターリンの逆鱗にふれ、結局ユーゴスラビアはコメコンから除名されてしまった。当時そのようにスターリンに楯突くことは余程の度胸と覚悟がいったわけですが、ユーゴスラビアは自説を曲げずに、自主管理制度の導入と政治・経済システムの分権化へとのめり込んだんです。そのチトーの言葉と同様のことを今になってゴルバチョフが言ってますね。実際そうだと思います。糸の切れた東欧諸国は、冒頭で述べたように、ハンガリー、ポーランドが先ず飛び出し、後を追った東独が西独との相合い傘に飛び込んでしまいました。ポーランド、ハンガリー、東独、チェコスロバキア、そしてユーゴスラビア北部のスロベニア、クロアチアの選挙結果では、かつての共産党が全く振るわないのに反し、南のルーマニア、ブルガリア、ユーゴスラビアのセルビア、マケドニア等に、社会党などと名称は変えてはいるが、旧共産党が依然として頑張っているのも発展の地域格差のしからしめるところでしょう。南北格差が歴然と出てますね。



堀川　哲氏

真瀬　その中で、僕はユーゴは非常に大きなモデルだと思うんですよね。というのは何かというと、東ヨーロッパを見る場合に民族主義の問題は絶対切り離せないわけで、今ポーランドはわからないけれど、最近の報道ですとチェコスロバキアでもスロバキア民族主義が出てきてるんですよね、例えばルーマニアだってソ連との関係ハンガリーとの関係がでてくるんです。ハンガリーだって今は人口八〇〇万の小国ですけれども、昔は大ハンガリー王国だったわけで、それとの関係でいけば当然大ハンガリー主義というのがおそらく出てくると思うんですよね。出してくる政策は民族主義。そういうことでいくと本当にユーゴというのは共産主義者同盟の支配が崩れてきているわけですね。すでにスロベニアとクロアチアでは共産主義者同盟の政権が崩壊してくる。そしてひどい経済危機である。いきつく先はバラバラにされて、それぞれECにくっついたりというぐあいになんかバラバラになってくるというほうが強い。

徳永　チトー大統領が生きていた頃は、ユーゴスラビアもまだ纏まっていた。しかし、ソ連型のコマンド・エコノミーを戦後導入してもうまくゆかなかったのは、パルチザンあがりの官僚が国家行政に無能力で、その後有能

な官僚が育たなかったのも原因の一つでしょうが、やはり民族問題が大きいですね。ユーゴスラビアを指令型の一国経済でひとまとめにすることは難しい。だから政治も経済も分権化してチトーの率いる連邦政府がこれを纏めていたのですが、チトー亡き後はこれが分断化され、更にスロベニア、クロアチアは分離化の方向に進んでいます。しかしながら分離しても食ってはゆけない。分離すると言いながらセルビアを牽制しているのが現状でしょう。

堀川　ゴルバチョフはどうなんですか、民族主義の問題について言えば、長期的なロングタームでみれば、分かれていいというような方向で考えているんでしょうかね。

徳永　そうせざるを得ないと考えて、手続きの問題にからめて手綱を引き締めているわけですね。いわばゴルバチョフ一家のお家騒動ですよ。長男のエリツィンは親父に反抗して、ロシア共和国に分家し、主権を宣言して親父の言うことよりも俺の言うことのほうが優位であると主張したり、親父に対しもうそろそろ隠居したらどうかとも言っている。その他の子供達エストニア、ラトビア、リトワニアは家出をしたいと騒ぎだす。親父は生活費は一切やらぬと締めつけるが、長男はこれをみて、俺の方から多少の援助をしてやろうとチョッカイをかけている。途中でゴルバチョフ一家に入った子供たちも多く、彼らは親父の言葉は押しつけがましいから使わないと反発し、ドアーに鍵をかけて閉じこもったり、兄弟喧嘩を始めたりしている。保守派の奥さん達は亭主のゴルバチョフが昨今あまりにも勝手に動きまわるので、皆の集まる党大会で徹底的に叩きのめしてやろうと、てぐすねを引いている。ざっとこんな調子なんですね。

堀川　エリツィンは、もう分かれようというわけですか。

徳永　ロシア共和国強化なんです。ソビエト連邦ではなくて、ロシア民族国家なんです。

真瀬　民族主義の激しさはわれわれ日本人の理解をこえるものです。ユーゴの例えばセルビア人とクロアチア人の確執。ものすごいものです。これはなんて言うんでしょうか、それからポーランド人とウクライナ人の仲の悪さ、ドイツ人とポーランド人の仲の悪さ、もうこれはちょっと我々の感覚としてはついていけません。

富森　ポーランド人はスロバキア人とは仲が悪いんですね。チェコ人はいいんだけれども、スロバキア人は嫌いなんです。

真瀬　ロシアと東ヨーロッパをみると、チェコとポーランドとハンガリーはかつて歴史的に華やかな時代があったんですよ。だけどウクライナとかスロバキアだとか、バルカン半島のルーマニアとか、セルビアですか、歴史的に輝かしい時代が一つもなかった。さして世界史に登場しない、いつも二流国民だったというこの歴史形成のおぞましさというか。

富森　ポーランドも確かに中世の繁栄の時期があったけれども、その後二回の亡国の歴史を辿っているわけでしょう。それが民族主義として今出てきているといえますね。

真瀬　でも、スロバキア人よりはいいんですよね、ポーランド人はかつて国をもったことがあるわけだから、スロバキア人というのはおそらく歴史始まって以来、常に他民族に支配されている。そういう歴史の重みというのはなかなか突破できないんじゃないかなという気がして。

堀川　エリツィンの改革のイメージはゴルバチョフと違うんですか、目標というか、それは何考えてるんですかね。ゴルバチョフは大きな広い意味では社会主義、共産主義者ですね、その中での修正をはかっていこうということなんですね。エリツィンも方向はそういう点では同じなんですか。

徳永　エリツィンさんはまだそういうのを出してないんですよ。社会党みたいなものです。この間札幌にみえた時に話を聞いたんですが、非常な論客ではあるんだけれど、主体性にも欠ける面があるし、ゴルバチョフあってのエリツィンといった感じでしたね。

富森　野党にいるべき人間ですよ。

徳永　徹底野党の性格をむきだしにしてたんですけど、それでも人間立場によって色々と変わるし、今度ロシア共和国の最高会議議長に選ばれたのでこれからどうなりますか。

富森　言葉は悪いけど、これからお手並み拝見という感じはありますね。

徳永　それとさっきの東欧の複雑な民族関係に関連してなんですが、大体国境を接している民族間の関係はあまり良くないですね。一つ国を挟んで離れているとまずまずの協調関係が保たれるようですね。それから東欧諸国をみていると、他国にやられた国と、他国をやっつけた国の相違が様々な面で出てきますね。多くはやられた方が多いんですが、やられの度合いといいますかね。東独はさすがしっかりしています。社会主義体制にあってもコメコンの優等生でしたからね。ハンガリー、ポーランドはやったり、やられたりしましたが、比較的国民に主体性がありますね。ルーマニアは、色々と取引関係で付き合いましたが、他力本願で信用に欠ける面が多いんです。ユーゴスラビアも中央部を西から東に流れるサワ河を境にして、南部のトルコ支配を受けた地域の社会意識、生活様式、労働モラルなどは、北の西欧化された地域に比べるとは格段の相違です。

真瀬　今思い出すんですけれど、サワ川から南がアジアだ。よく働かない。サワ川から北はよく働くとユーゴの友人が言っていたことを思いだします。

徳永　僕はあそこが広い意味でヨーロッパとアジアの接線だと思う。

真瀬　だけどそのことをベルリンの友達に言ったんですよ。そしたら笑ってるんですね。ドイツ人からみれば何をクロアチア人が生意気な、働きもしないでということになるんです。

堀川　もうそろそろあまり時間もないんですが、最後に社会主義について是非ここで言っておきたいということが何かありましたら。

工藤　別に是非というのではありませんが、どうもやっぱり社会主義のイメージがつかめない。それからこれから発展していくものが何主義と言われるかは別問題というのがありましたけど、実際の七〇年間の歴史の中でソ連が中心になって作ってきた経済システムというのが人間を腐らせたシステムだと言われれば、そのイメージの根源みたいなのがなかなかつかめないということで、今日は勉強になりました。また機会があったら是非教えていただきたい。

堀川　富森先生は先程社会がデモクラシーの方向に進んでいくとき、それを資本主義と呼ぶか社会主義と呼ぶか、それは第一次的な問題ではないと言われた。ただなんて言いますか、現実に存在する社会主義はいろいろありますけれども、理念としての社会主義のイメージと概念は一応あるわけですね、これからどういう方向で流れていくかはわかりませんけれども、東欧についてもソビエトについても最低限、社会主義という言葉を使う場合、これを守らなければならないという基準みたいのはあるわけでしょう。メシが食えればなんであってもいいというか、どうなってもいいというわけでもない。それはどうなんでしょうか。

富森　経済システムですか。

堀川　政治システムについては別に問題はないでしょう。最低限守らなければならない制度としては、別に議会制民主主義になっても、社会主義の政治学的な理念と食い違うわけではないですからね。社会主義は第一次的には経済的なカテゴリーであるというふうに僕らは考えたんですが、最初は理念的なものもありますけれども、経済のシステムとして資本主義と違うものを作る、それによって始めて人間的なものの解放も可能になるんだということで、資本主義的な経済システムのなかでは人間は駄目になるという、経済システムとして社会主義で守らなければならないものということでいろいろ必要条件といいますか十分条件といいますか、そういうものを考えてきたんですが、それはどうなんですか。

富森　難しい問題ですね。といいますのは、

いわゆる資本主義における経済システムと言われるものでも、国によってもずいぶん違いますし、資本主義経済システムとか社会主義経済システムとか、単純に割切ってものを考えると足を掬われると思うのです。それに先程もいいましたように「社会主義経済システムとは何か」、それは非常に単純化された理論しかないんです。社会主義経済で「計画と市場の有機的結合」といわれ始めて久しいですが、言葉としていうのは簡単ですが、これが実現出来ないから今のように経済が危機的状況になってしまったのです。確かに市場経済をとり入れてくると、例えば失業が出てくる。現在ポーランドでは失業者が約五〇万人、毎月一〇万人増大し、今年中に一三〇万人になるだろうといわれています。確かに、いわゆる「社会主義経済システム」では失業概念はなかったはずです。じゃ、失業者がいるからポーランドは資本主義であると、短絡的にきめつけるのは意味のないことです。それぞれの国は、それ以前の歴史もさることながら少なくとも二〇世紀にはいってからのそれぞれの歴史を好むと好まざるとにかかわらず背負っているわけで、それぞれがその国の現状のなかで、それぞれの国に合ったやり方を模索していく以外にないのです。人間を救えないイデオロギーも経済システムも意味のない存在です。最近、東欧諸国のめざすのは北欧福祉国家型などといわれてもいますが、そんな単純にはいえないのではないですか。お答えにはなっていないと思いますが。正直いって、これ以上お答え出来ないですね。

徳永　国有であれ社会有であれ協同組合的所有であれ、これら生産手段の社会的所有が社会主義の基本的基盤であるとすれば、生産手段の所有形態が自由化され、労働市場、金融市場が育成されるにつれ、経済面からみた社会主義の拠り所は消滅しつつある、と見ることが出来るでしょう。しかしこの所有の自由化は、完全なる私有化ではなく、国有、社会有、協同組合有、外資有、私有などの何れかを選択する自由なのです。ソ連でも現時点では土地の完全私有化に踏み切ってはいないし、大規模企業は国有で残し、ユーゴスラビアでも私有化の自由は与えられたが、一方社会有も多く残っています。しかし東独は勿論のことポーランド、チェコスロバキア、ハンガリーとユーゴスラビア北部のスロベニア、クロアチアなどは社会主義の最低限守らなければならないシステムを求めるどころか、社会主義それ自体を全く未練も感ずることなく捨て去ってますね。ソ連、ルーマニア、ブルガリア、セルビアなどには未だに社会主義の拠り所として国有、社会有に拘泥している保守派もいますが、これは企業の近代化、効率化の拠り所では決してないわけです。目下の改革派の関心事は、如何にして労働者を活性化し、「やる気」を起こさせる経済システムを構築するかにあるのです。

富森　ただそれが軌道にのるまでが大変です。今の経済水準では。

徳永　企業を効率化すれば、お役に立たない労働者は職を失うことになるし、また国家の財政赤字を克服するためには今までどうりの国庫補助は切り詰めなければなりません。現にユーゴスラビアではマルコビッチ改革以降企業の倒産は急増し、先程富森先生が指摘されたポーランドと同様に失業者が急激に増えてきています。しかしこれは競争力ある経済再建のための生みの苦しみとして止むなしとして倒産に対してはかなり冷淡に対応し、失業者に対しては中小企業、私企業の育成で吸収しようと図っており、次第にその成果も出てきているようです。

堀川　申し訳ありませんがもう時間がなくなりました。司会の不手際であまりクリアーなまとまった議論はできなかったんですけれど、事態は流動的で我々としても判断のつけにくいということもあるんではないかと思います。今度の座談会の後、もう一度ソ連東欧情勢の動きによって、今度また機会がありましたら同じようなメンバーでもう一度話し合いをしてはどうかと考えております。本日はどうもありがとうございました。